

生きがい・幸せのニーズと公共施設マネジメント

1160464 平井 沙織

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

高知市からの依頼に基づき市内の公共施設「木村会館」の施設マネジメントについての検討を行うとともに、高齢者の幸せについても検討することで、高齢化社会における公民館の利用の在り方についても考察した。老朽化が進む公民館を対象とし利用者にインタビュー調査やアンケート調査を行った。その結果、「木村会館」として地域に愛される公民館に生きがいを感じる利用者が大変多いことが判明した。この生きがいを詳しく分析し、今後、少子高齢化社会の公民館になにが求められているのかを提案した。また、今後増大する公民館利用の高齢者が、本当に求める幸せとはどのような構造となっているのかについても明らかにした。

2. 背景

高知市役所からの依頼により老朽化に伴う公民館の社会的機能や将来ニーズを考える施設マネジメントに参加した。地域住民から「木村会館」として愛される公民館に対する利用者の要望に気づいた。

3. リサーチクエスチョン

少子高齢化社会における公民館はどうあるべきなのか。高知市役所からの依頼で調査対象となっている木村会館（地図 3-1 写真 3-2）を事例として研究を進めていく内に、高齢者が真に求める幸せについても疑問を持った。木村会館はどのように少子高齢化社会に対応していくべきなのか？あるいは、木村会館が利用者へ提供している本質は何であるか。

4. 目的

木村会館のあり方について、そのマネジメントの方向性を明らかにする。そのために、高齢者が木村会館に何を求めているのかを知る。（※木村会館の主なサービス内容：1F 風呂・電気治療器・囲碁部屋・集会所・ロビー、2F：図書館・調理室・教室、3F：ホール）



（地図 3-1 木村会館の場所を示す）



（写真 3-1 木村会館外観写真 住所高知市旭町 3 丁目 121）

5. 研究方法

①木村会館周辺地域（37地域）の30年後までのコーホート分析を行う。②高齢者のニーズを調査する。ここでは予備インタビューを行い、その結果に基づきアンケートの作成や配布を行う。③では、①②を合わせて将来ニーズを予測する。④将来ニーズ予測をうけて木村会館の将来像を明らかにし、施設マネジメントの方向性を示す。⑤②の高齢者の将来ニーズをうけて高齢者サービスのあり方を検討する。ニーズの高いと判明したサービスについて再インタビューを行う。⑥⑤の再インタビュー結果を受けて結論を出す。研究方法①であるコーホート分析での注意点としては、高知市において死亡率のデータが5区分ごとでしか表記されていなかったため全国の3区分ごとの統計と比例させている。コ

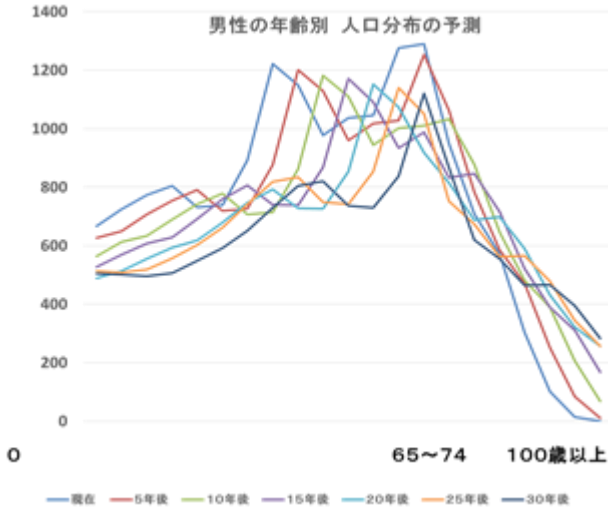
一ホート分析の例として図5を挙げる。また、再開発計画がある町（下島地区・中須賀地区）については、完成時に人口分布が変化すると仮定した。群馬県高崎市の同様の事例（群馬県高崎経済大学 地域政策学会

http://www1.tcue.ac.jp/home1/c-gakkai/kikanshi/ronbun9-4/iizuka.pdf）から再開発後の人口が概ね2倍となること、高知市内の既存再開発地域での人口分布を参考に作成した。

現状	5年後		10年後		15年後		20年後		25年後	
	男	東城山町	男	東城山町	男	東城山町	男	東城山町	男	東城山町
0~4歳	29	28	28	25	25	24	23	22	21	20
5~9歳	25	23	23	21	21	20	19	18	17	16
10~14歳	20	18	18	16	16	15	14	13	12	11
15~19歳	17	15	15	13	13	12	11	10	9	8
20~24歳	17	15	15	13	13	12	11	10	9	8
25~29歳	21	19	19	17	17	16	15	14	13	12
30~34歳	26	23	23	20	20	19	18	17	16	15
35~39歳	41	36	36	31	31	30	29	28	27	26
40~44歳	26	23	23	20	20	19	18	17	16	15
45~49歳	21	19	19	16	16	15	14	13	12	11
50~54歳	24	21	21	18	18	17	16	15	14	13
55~59歳	28	24	24	20	20	19	18	17	16	15
60~64歳	38	32	32	26	26	25	24	23	22	21
65~69歳	24	20	20	16	16	15	14	13	12	11
70~74歳	27	22	22	17	17	16	15	14	13	12
75~79歳	28	22	22	17	17	16	15	14	13	12
80~84歳	32	25	25	19	19	18	17	16	15	14
85~89歳	48	36	36	27	27	26	25	24	23	22
90~94歳	31	24	24	18	18	17	16	15	14	13
95~99歳	10	8	8	6	6	6	6	6	6	6
100歳以上	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

(図5 コーホート分析例示：東城山町)

5.1 37地域年齢別人口分布



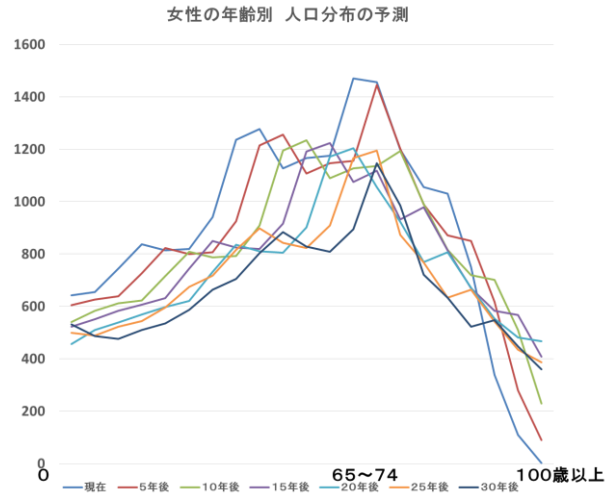
現在：前期高齢者2239人、後期高齢者1699人

30年後：1986人、後期高齢者2781人

上図は男性のコーホート分析結果をグラフにしたものである。男性の前期高齢者の人口は20年後までは減少するが、その後若干増加に転じる。一方、後期高齢者は著しく増加すると予測される。

続いて、次項はじめに示す図は女性のコーホート分析結果をグラフにしたものである。女性は、男性よりも大幅に人数

が多いことがわかった。将来、前期・後期高齢者ともに減少することがわかった。女性は男性と比較し長寿で後期高齢者が既に多いことが影響していると思われる。



現在：前期高齢者：2655人 後期高齢者：3285人

30年後：前期高齢者2132人 後期高齢者3230人

(※データは全て高知市の人口データ HP のH25年度数値より作成)

6 結果 (施設マネジメント)

6.1 年齢別男女別利用状況

性別	年齢 (歳)	平均回数	
		(改修後)	(現在)
男	0~64	3.40	1.40
男	65~	4.81	1.56
女	0~64	2.67	0.18
女	65~	5.60	3.03

図6-1-1 アンケート調査より、現在の利用頻度と改修後による利用頻度の変化 (延べ利用回数)

利用者のニーズが満たされれば、利用頻度 (延べ利用回数) が2~3倍に増えることが分かる。また、コーホート分析結果から得られた将来人口及びアンケート調査結果から得られた来館意向の動向に基づき、現在および将来の延べ利用回数を予測した結果からは、木村会館の利用者 (利用意向がある人も含む) がおよそ3倍に増加することが分かった。

(図 6-1-2、図 6-1-3)

現状の利用状況

性別	年齢(歳)	現在	5年後	10年後	15年後	20年後	25年後	30年後
男	～64	41846	38908	36648	35234	33102	32128	29407
男	65～	15260	17402	18004	17851	17290	17148	17387
女	～64	5771	5291	4926	4713	4359	4247	3895
女	65～	44692	47072	45658	42632	39601	38484	37676
合計		107569	108673	105236	100430	94352	92007	88365

(図 6-1-2 コーホート分析とアンケート結果より利用状況を掛け合わせた ※延べ利用回数の数値である)

改修後の利用意向

性別	年齢(歳)	現在	5年後	10年後	15年後	20年後	25年後	30年後
男	～64	101626	94491	89001	85567	80389	78025	71416
男	65～	47051	53656	55512	55041	53311	52872	53608
女	～64	85603	78490	73067	69906	64661	62995	57779
女	65～	82600	86998	84384	78791	73191	71126	69633
合計		316880	313635	301964	289305	271552	265018	252436

(図 6-1-3 図 6-1-2 と同様)

6.2 木村会館サービス別利用状況

以下の表 (A) (B) はアンケート結果より集計した数値であるが、風呂の利用者が少ない結果となった。しかし、現地インタビューにおいては風呂の利用者も多く存続を求める声が聞かれた。その理由としては、木村会館の風呂を利用する高齢者のほとんどは自宅に風呂を構えていない人が多く、昔は銭湯を利用していたという。しかし、たくさん存在していた銭湯が時代の変化によって消失してしまったため、木村会館に設置された風呂を利用しているからである。周辺のホテルの風呂を利用するという代替案もあるが、交通費や入浴料を合わせると1回につき1000円以上かかってしまうため、やはり徒歩や自転車で行くことのできる距離にある木村会館の風呂はこれからも存続して欲しいとの声が聞かれた。

(A) 現状施設

	集会所	図書館	風呂	囲碁	ロビー	講座	健康器具	利用なし
現状	24	33	0	2	0	16	2	9
将来	32	49	1	3	0	31	14	25
増加率	1.33	1.48		1.50		1.94	7.00	

(注1) 本人のみの回答結果

(注2) 単位: 延べ人数

(A) 現状のサービスでは特に集会所・図書館・講座が現在と将来に渡ってニーズが高いことがわかる。将来、さらに高齢者が増えるので現在よりも最大でおよそ2倍程度ニーズが増加することがわかる。

(B) 将来増える施設

	ロビー	イベント	飲食	室内遊び	講座	自習室
将来	20	13	32	7	5	5

(B) 将来増えて欲しいサービスについてのアンケート結果からはロビー・イベント・飲食ができるスペース・室内遊びの意見が挙がった。室内遊びの意見が出ているということは、高齢者のニーズだけでなく、子育て世代のニーズにも答えていかなければならないということがわかった。その他に、ロビーや飲食と挙げている人が多くいる。これについては、アンケートのコメント欄より、おしゃべりしながら軽食したいというような声が多く寄せられていた。木村会館に新たなニーズがあることがわかった。

6.3 木村会館の将来像を明らかにし施設マネジメントの方向性を示す

	初期投資	LCC(30年間)	B/C(1)	B/C(2)
案1) 現状維持案(1946延m ²)	0	1228	2.2	1.3
案2) 仕切変更案(1946延m ²)	209	1105	3.5	2.1
案3) 全面改築案(1813延m ²)	455	1269	3.0	1.9
案4) 増床改築案(2780延m ²)	671	1977	3.9	2.3

(注1) 初期投資およびLCCは単位: 百万円である。
(注2) B/C(1)は、国土交通省基準の1分当たり時間価値で算出した。
(注3) B/C(2)は、高知県最低賃金(H26年度)に基づく1分当たり時間価値で算出した。

(図 6-3-1 高知市木村会館整備基礎調査委託業務報告書より)

増大する高齢者の生き甲斐の確保と健康維持、少子化時代の子育て支援の意義を踏まえて、新たなサービスを含む利用者増大による市民に対する便益と、その為に要する行政コストの増分を比較すると、前者の方が大きいので、配分可能な予算、他分野予算とのバランスによっては、以下に示す4項目について改築・増築を行うことに正統性が存在する。

一点目は、自転車および原付の駐輪場を拡充することである。近隣に住む住民が自転車で来館することは珍しいことではないが、中には薊野や朝倉方面から15～20分かけて自転車で来館する人もいた。また、土日や平日の夕方に図書館

で勉強するためにやって来る中学生も自転車で来館している。彼らにインタビューしてみたところ、近隣に勉強できるようなスペースが無く木村会館の図書館の勉強スペースは利用しやすいとの声が聞かれた。アンケートからも、駐輪場を求める声は少なからず記載されていたので充実させるべきである。2点目に挙げるのは、飲食・会話が楽しめるロビーを整備することである。風呂上りの時間や、風呂の待ち時間中にロビーで会話を楽しむ高齢者が大変多く見られた。また、風呂は利用していなくても親しみのある木村会館のロビーでくつろいでいる高齢者の姿も見られた。現在のロビーを飲食も可能なスペースにするためには広めでありかつ防災機能を考えてものにしていくことを提案する。2015年度も台風の避難所としても利用されていたようであり（高齢者女性へのインタビューより）避難所としての機能も忘れてはいけない。3点目は、講座や図書館の拡充である。講座については、現在・将来ともに大変ニーズが高い。新たな講座に関するニーズも存在するので、女性だけに限らず男性も気軽に参加できるような講座の開設を考えていかなければならない。アンケートの「あったらいいと思う講座」の項目でよく書かれていたものは、着付け教室、絵画教室、運動講座、俳句講座、男性向け講座である。また、アンケートからは若い世代も利用できるような木村会館になって欲しいというような声もあった。木村会館に勤めておられる方からは、現在のところ講座について、若い世代と高齢者が入り混じって盛んに交流できるような講座は存在しないという話をお伺いした。世代間交流ができるような講座は無く、もしそういった講座ができれば互いに良い刺激になるのではないかと。昔と比べ近所付き合いが希薄になりつつある現代で、交流を通して少しでも互いの現状を理解し社会に興味関心を抱く機会になるのではないかとというのが若い世代である私の意見である。

図書館については、全5回の現地調査から平日の昼間は男性高齢者の居場所として大きな役割を果たしていることがわかった。彼らのインタビューから、「毎日ここへ来て新聞を読んでいる」「暇つぶし」「夏場は家にいるとエアコン代がかかるのでよくここへ来る」といった声や「新聞を読むことで知識が蓄えることができ、頭の活性になる」という意見が寄せられた。これらのインタビューに答えて頂いた人々は、ほとんどが自転車での来館である。退職後の男性が社会とつなが

るための憩いの場であることは間違いなく、自転車で気軽に来館できることが彼らの居場所となった理由になるだろう。さらに休日の現地調査では親子連れが図書館に来館する姿が見られた。休日であるので常時3～4組の親子連れを目にした。図書館でゆっくり過ごす親子もあれば、本の貸し借りを済ませてすぐに帰る親子もいた。こういった、子育て世代からは図書館は子供の教養の場として利用されており私自身も幼い頃に図書館でたくさん本を読んだことや多くの時間を過ごしたことが記憶にある。図書館に来ていた幼児を連れた母親のインタビューからは木村会館の敷地内にある公園の充実を求める意見も伺った。

高齢者女性による講座ニーズが高く、講座を充実させていくことももちろん大切なことであるが高齢者男性・若い世代に目を向けると男性にも需要があると思われる講座・図書館の拡充についても議論されていく必要がある。

4点目は、エネルギー効率向上のための空調設備である。空調設備の現状維持を継続する場合、毎年1.5百万円程度のエネルギー損失が発生することから、30年間でおよそ45百万円の損失を被ることになることが判明している。熱源設備・各室喚起設備・局所喚起設備の3項目については課題が具体的に示されており、安全を考慮すると優先的に改善していくべきではなかと考えた。（高知市木村会館整備基礎調査委託業務報告書より）

7. 木村会館を利用する高齢者の生きがい・幸せ

7.1 生きがいの定義

生きがいは、おおざっぱには、生きることの価値や意味として捉えられるが、これを厳密に定義しようとするのは容易ではない。その考察によって得られた定義が唯一普遍的であると断言することはできない。これは、ある人にとっての生きがいが他の人にとってもそうである保証は無いからである。生きがいは最終的に主観的評価によって定まるものである。（エイジングの社会心理学 p.110 より）

生きがいを測定する方法は一般に2つ存在する。一つ目は日常生活を全体として捉えたときの認識を問う方法である。これは「心の状態」を問うことである。例えば、自らの生活に価値や意味があると感じられる場合それを生きがいと呼ぶ。二つ目は、日常生活の特定の部分に限定し、これに対して認

識を問う方法である。これは、「源泉や対象としての事物」を問うことである。具体的には、対象とする事物が生きることによって価値や意味をもたらしているかどうかである。よく言われているのは、「私の生きがいは孫です。」のように、対象がはっきりしていることが重要である。(参考:エイジングの社会心理学 p 110 より)

次項はじめに示す図は、生きがい感測定方法の比較である。

	メリット	デメリット
心の状態として測定	①生きがいを一義的に定義・測定できる ②数量的データであることを前提とする多様な統計分析手法を用いることが可能	①回答者の持つ生きがいの多様性を分析できない ②研究者の恣意性を排除できない→バイアスがかかる
源泉・対象を測定	①回答者の持つ生きがいの多様性を分析できる ②生きがい対象の代替可能性を検討することができる	①回答者の恣意性を排除できない ②統計分析手法が大幅に制限される

7.2 生きがいの測定方法

生きがいの測定方法としては 6.1 で述べた 1 つ目の「心の状態」を問う方法を利用する。生きがいを感じている状態だと考えられるような、木村会館での過ごす心理状態を表す質問文で回答者に 4 段階評価してもらい回答して頂いた。結果は以下の通りである。

	1F				
男・女	女	女	女	男	男
目的	フコ	フコ	フコ	囲碁	休憩
年齢	70	72	83	74	90
交通手段	歩	自	電車	車	歩
くつろぎ	4	4	2	4	4
動く	4	4	4	1	4
時間を埋め	4	4	4	4	4
出会い(人)	4	4	4	4	1

	3F								3F							
男・女	男	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女	女
目的	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展	展
年齢	75	75	75	74	78	75	74	81	62	75	72	73	70	75	40	
交通手段	自	歩	歩	歩	自	自	自	歩	車	歩	歩	歩	パ	パ	車	自
くつろぎ	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	1	1	1	1	4	
動く	4	4	4	4	4	4	4	4	3	4	4	4	1	4	4	
時間を埋め	2	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
出会い(人)	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	

	2F							
男・女	女	女	女	女	女	女	女	男
目的	体	体	体	図	図	図	図	図
年齢	83	78	70	85	12	12	12	13
交通手段	電自	歩	自	歩	自	自	自	自
くつろぎ	4	4	4	0	2	2	2	2
動く	2	4	4	0	3	3	3	3
時間を埋め	4	4	4	4	3	3	3	4
出会い(人)	4	4	4	0	3	3	3	3

※自・・・自転車 歩・・・徒歩 バ・・・バス 電自・・・電動自転車 体・・・体験教室 図・・・図書館 ホ・・・ホール 展・・・展示会 (体験教室と展示会については頻繁に行われているわけではなく、2015. 11/28. 29 に開催されていた木村会館文化祭にインタビュー日程を設定していたため)

休日の時間に図書館へ勉強に来ていた中学生を除くと、ほとんどの利用者が木村会館で過ごす時間をくつろぎの時間であると回答している。測定方法の特性により研究者である私の恣意性を排除できていない点を考慮しても、木村会館で過ごす時間を生きがいだと感じている方が利用者のほとんどに当てはまるということがわかった。

7.3 幸せの要因

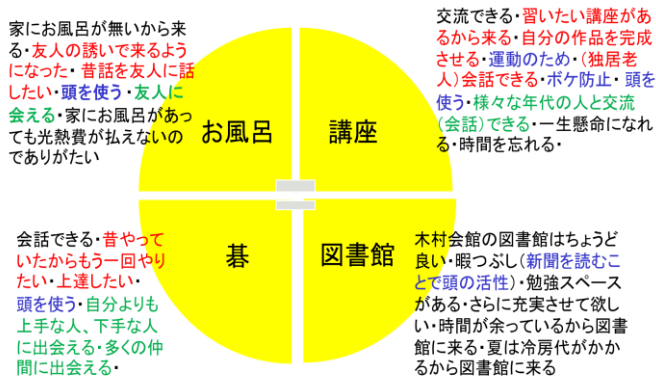
7.2 で行った生きがい測定のインタビューで木村会館利用者から得られた声 (特に高齢者) をまとめると以下のような声挙げられた。

- ・習いたい講座があるから来る
- ・交流できる ・頭の活性になっている
- ・時間を忘れる ・会話ができる
- ・楽しめる 充実している
- ・毎日、木村会館に来ている。
- ・家にお風呂がないから来る
- ・必死になれる
- ・仲間と出会うことができる。
- ・お風呂・・・古くても入れれば十分
- ・友人の誘いでお風呂に来るようになった。
- ・様々な年代の人と交流 (会話) できる。
- ・暇つぶし ・外出のきっかけ
- ・着付け・・・頑張っ覚えてる

- ・頭を使う ・ボケ防止
- ・木村会館は歩いて来ることができる距離である。
- ・木村会館に来ることで幸せを感じている。

(インタビューの一部より)

これらの声をサービス別に振り分けたところ以下のようになった。(図 7-3-1 参照)



(図 7-3-1 インタビューの結果をサービス別に分類しさらにそれぞれの中で共通するものを色別に分けた。)

(図 7-3-1) よりサービス別に分類するとそれぞれから共通する概念を見つけた。私は、それぞれ分類したものが「自己実現・健康維持・集う機会(場所)」の3つに集約できるのではないかと考えた。この3つが実現されることが木村会館を利用する高齢者にとって幸せであり、これからの高齢化社会において木村会館はこの3つが実現できるものを提供することが望ましいと考えた。

続いて、先行研究やそれぞれの研究者が発表している幸せの要因と比較する。(図 7-3-2) では、私が考えた木村会館を利用する高齢者の幸せの要因である「自己実現・健康維持・集う機会(場所)」と比較したものである。

①リチャード	②岡本	③Myers and Dinner	④慶応SDM	⑤Larson					
家族関係	x	健康自己評価	0	自己肯定感self-esteem	x	自己実現と成長	0	健康	0
家計の状況	x	家族との会話	x	個人的コントロール感・パワー感	0	つながりと感謝	△	社会的経済地位	x
雇用状況	x	社会的役割	x	楽観主義	x	楽観性	x	社会活動	x
コミュニティと友人	0	日常活動	x	外交的性格	0	人目を気にしない	x		
健康	0	ソーシャルサポート	x						
個人の自由	△								
個人の価値観	△								

(図 7-3-2 他の研究者が出した幸せの要因との比較)

○・・・あてはまる △・・・それなりにあてはまる ×・・・あてはまらない

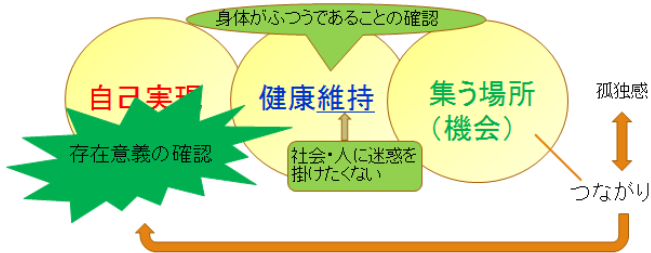
この図を見ると、どの研究者も表現の方法が異なるが似たような項目を挙げていることが分かる。それぞれが挙げている要因と私が挙げた要因が全て一致するという先行研究や研究者はいないことがわかった。この比較をして気づくことは、それぞれの研究者が発表していることはどれも一般的なことであり、特に木村会館に来るような高齢者には当てはまらないということだ。この中でも、Larson は高齢者を対象とした主観的幸福感に関する研究から、幸せの要因を「健康・社会的経済地位・社会活動」の3つに定義しているが、彼は米国で研究調査を行っている。そもそも、「生きがい」という概念は日本独自のもので欧米諸国にはそれほど深く認識されていない。(健康 長寿ネットから引用) 同じ高齢者であっても文化や環境が違うと「生きがい」に対する捉え方も異なってくるだろう。よって、彼の挙げた幸せの要因と木村会館利用者の幸せは一致しない。また、慶応 SDM (システムデザインマネジメント研究科) の方が行った研究では、万人に当てはまるような幸せ要因がかかげられているが木村会館を利用する高齢者にはそれほど当てはまらず、いかに一般的な要因が挙げられていることがわかる。以上から、私の研究で出した幸せの要因の3つは「木村会館を利用する高齢者が感じる幸せの要因」というバイアスがかかっていることがわかった。その上で、木村会館を利用する高齢者の幸せの要因は特徴的であるということがわかってきた。

8 木村会館を利用する高齢者の本質

木村会館を利用する高齢者の特徴を分析すると、毎日図書館で新聞を読む・風呂の日はほぼ来る・講座のために来る・碁を打つために来る人が多いことがわかった。以上の4つから言えることは、木村会館に来る高齢者は自分の存在意義・健康・社会とのつながりを失いかけている人々であるということだ。彼らは自分の存在意義・健康・つながりを失うことを恐れ、この3つの要素を失うことが不幸につながると考えている。よって、この3つの要素を失わずに維持すること・保持を確認することが木村会館を利用する高齢者の幸せであり、ニーズといえる。多くの住民の幸せの源泉であるとも言える木村会館がつながりの場を提供することで人々は自分

身の存在意義を確かめることができ、あるいは自分の身体が普通（健康）であることを確認するということが実現できている。（図 8-1）※ここでいう普通（健康）とは、高齢者が誰からも世話されることなく歩くことや食事が自力でできるという状態。

利用者が木村会館に求めているもの



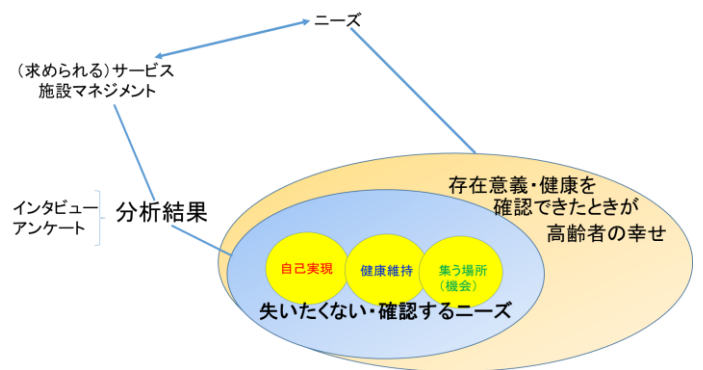
(図 8-1)

9 今後の木村会館のあり方

存在意義・健康・つながり、この3つの要素を常に自分が保持していることを確かめるために高齢者は木村会館を利用することがわかった。言い換えれば、木村会館のニーズは存在意義確認と健康維持のニーズがあることが判明した。（図 9-1）コーホート分析から結果がわかるように、木村会館の周辺37地域の高齢者はさらに増えていく。よって、木村会館へのニーズも高まっていくことが考えられる。しかし、本来このニーズはないほうが好ましいものである。なぜなら、全ての人々がいつまでも社会とつながり、存在意義を感じていきいきと生活してゆけることが最も好ましい状態であるからだ。だが、ある年齢を迎え、退職してしまえば誰かから必要とされることもなくなり社会とつながることができなくなってしまう人は少なくはない。また、全ての人々がいつまでも現役で元気に働けるような身体であるとは限らない。このような人々が今後増えてくると予想されるが増やさないようにしていくことも重要な課題になってくると私は考えている。農家の高齢者や過疎地域等に暮らす人々の周辺では、木村会館のような場所が必ず近辺にあるとは限らず近所付き合いも盛んであるとはいえない。そのような場所に暮らす高齢者がみんな不幸だと考えているとは限らない。その土地で、たった

一人でも幸せに感じている可能性も十分にありうる。

存在意義・健康・つながりを確認しないと幸せになることができない特殊な人々が今後さらに増加することが今回の研究によって明らかにされたので、木村会館はニーズにこたえることができるようなサービスを提供していくべきである。時代の流れで近所づきあいが昔ほど盛んではなくなってきている事実もあり、木村会館のような場がコミュニティの役割を果たしているということも言える。



(図 9-1 本研究全体像)

10 少子高齢化において木村会館の役割

現在、木村会館の利用者の半数以上を占めるのが高齢者であるが、彼らのニーズや幸せの本質を分析したが高齢者だけでなく子育て世代や中高生のニーズに関しても目を向けていかなければならない。アンケートからは「こどもの遊び場があったらいい」といった声や「学生の自習席の拡充」といった意見が寄せられた。また、実際に私が木村会館へ足を運んだ際、中学生が図書館で勉強していた光景が見られた。このように、幼い子どもを持つ世代や中高生がいる家庭からも必要とされており木村会館は様々な世代に利用される価値がある。このようなニーズに答えるためには、図書館の拡充あるいは構造的な課題を改善していくことが望ましいだろう。図書館の内容自体はアンケートやインタビューから「図書館を広くしてほしい」という意見や「このままの規模を望む」といった意見が寄せられた。この件については今後議論が必要であろう。また、3Fからの音漏れ・振動等は図書館利用者の妨げになっているとの意見が多く寄せられていることから木村会館が改修となった場合には、図書館の静かな環境を守るため防音や振動対策等を優先させていかなければならない。

11 将来の公民館のあり方

今回の事例研究の対象となった木村会館は、利用年齢層が非常に高いことに加え大半が女性であった。木村会館周辺地の女性数自体が多いこと、もともとの平均寿命が男性と比べ女性の方が高いということなどが上げられる。今回の結論は、木村会館のような利用年齢層が非常に高い公民館に当てはまると私は考えている。仮に、利用者の年齢層が60歳前半、あるいはそれ以下の年齢層が多ければ今回とは異なる結論になっていたであろう。木村会館はもともと多くの市民のために社会事業・文化交流・教養を深めるために寄贈されている。これは、公民館としての事業そのものであるが利用者のニーズは時代とともに変化していくものである。例えば、木村会館特有の風呂事業に関しては本来の公民館の事業とは言い難い。しかし、今回のアンケート・インタビュー調査からわかったように現在存在するニーズにはしっかりと向き合わなければならないと感じた。今後木村会館改修がなされると決定されれば、このニーズから目を背けてはならないと考えた。今後、日本社会の少子高齢化が進むにつれて全国の公民館では木村会館で見られたような現象が多くなっていくであろう。その際には、今回の結論をぜひ参考にして頂きたい。

引用文献・参考文献

- [1] 「しあわせの心理学」 小宮 昇著
- [2] 高齢者心理学 権藤 恭之著
- [3] エイジングの社会心理学 辻 正二 船津 衛 著
- [4] 健康 長寿ネット公益財団法人 科学振興財団
<http://www.tyojyu.or.jp/hp/page000000800/hpg000000723.htm>
- [5] 慶応大学大学院システムデザインマネジメント研究学科
http://lab.sdm.keio.ac.jp/maenolab/RikaHasunuma_masterthesis.pdf
- [6] 高知市 人口データ HP
<http://www.city.kochi.kochi.jp/soshiki/2/toukei.html>
- [7] 高知市木村会館整備基礎調査委託業務報告書
(高知工科大学地域連携機構 社会マネジメントシステムセンター)
- [8] 人口問題研究所 <http://www.ipss.go.jp/>
- [9] 公民館 ウィキペディア
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%AC%E6%B0%91%E9%A4%A8>
- [10] 高崎経済大学地域政策学会
<http://www1.tcue.ac.jp/home1/c-gakkai/kikanshi/ronbun9-4/iizuka.pdf>